

高齢者の活動意欲に対する介護者の声かけの影響

The Influence of Care Workers' Speech Manner the Vitality of the Elderly

木林身江子*¹ 木田文子*² 五十嵐さゆり*³ 津島三代子*⁴

KIBAYASHI Mieko KIDA Fumiko IGARASHI Sayuri Tsushima Miyoko

*1：静岡県立大学短期大学部社会福祉学科 University of Shizuoka, Junior College

*2：静岡福祉大学短期大学部介護福祉学科 Shizuoka University of Welfare Junior College

*3：横浜 YMCA YMCA福祉専門学校介護福祉科 Yokohama YMCA College of Human Service

*4：横浜 YMCA YMCA福祉専門学校介護福祉科 Yokohama YMCA College of Human Service

I. 研究目的

介護保険制度が開始されて以降、介護予防が現代社会の重要課題として認識されるようになってきた。その理由は、わが国の後期高齢者人口が増加していることに加え、平成15年度末の介護保険制度における「要支援又は要介護」と認定された者のうち65歳以上の者の数が370.4万人⁽¹⁾となっており、わが国の65歳以上の高齢者人口（平成15年10月1日現在で2431万人）⁽²⁾の約15%を占めている現状が背景にある。長い高齢期を健康で生き生きと暮らせることは、人類共通の願いであるだけでなく、財政負担の面からも寝たきりや認知症を予防することが緊急の課題となっている。

介護予防の概念は、高齢者が要介護状態に陥ったり、要介護状態がさらに悪化することなく、できる限り健康でいきいきとした生活が送れるようにすること¹⁾であり、単に、要介護状態となるのを予防するだけでなく、要介護の状態になっても可能な限り心身の衰えを抑制し、生き生きとした生活を継続できるよう支援するということである。つまり介護予防は、介護保険制度の理念に謳われている自立を支援することにつながるものと捉えられるものである。

介護予防の一番のねらいは廃用症候群の予防であるといわれている。廃用症候群は、(1)老齢による体力低下・疾病・障害といった身体的要因、(2)家屋構造、周囲の接し方・態度、友人の存在等の環境要因、(3)活動意欲の低下、障害受容、性格といった心理的要因の3つが相互に影響しあうことにより、活動性が低下し「閉じこもり」といわれるような状態を生むことが原因となる。また、後期高齢者にとっては「転倒すると危ないから」といった周囲からの声かけを受け入れ、若者に迷惑をかけないように、日常生活における活動性を低下させ、静かに老後を過ごそうとする日本人特有の美意識があることなど、さらに悪循環を招く原因と考えられる。東京都老人総合研究所の調査によると、生活機能の低下を規定する要因として、年齢が高いほど、移動能力や健康度自己

評価が低いほど、そして友人との付き合いが少ないほど、生活機能が低下しやすい傾向にあることが報告されている。また、活動能力の低下に関する研究として、本間ら²⁾の研究によると、「やりたいことがある」ことと活動余命の延長は有意な関連があると報告されている。

そこで、今回筆者らは、高齢者施設に入居する高齢者の生活機能の低下を規定する要因として「人的環境」を取り上げることとした。なかでも、周囲の接し方・態度といった人的環境を良好に整えるということは、高齢者の活動意欲を維持・向上させ、ひいては廃用症候群の予防につながるものと考えられる。人的環境として周囲の接し方・態度をあげたが、そのうちの一つに介護者の「声かけ」が含まれる。介護現場における声かけは、介護という身体接触をともなっている場面が多く、バーバルとノンバーバルのコミュニケーションの相互作用によって高齢者の心に刺激を与え、心身の健康や生活の質の向上に欠かせないストロークになるのであり、大切な援助技術であると考えられる。諏訪は「老人への声かけは、老人の心に刺激を与え、施設において人間らしい生活を実現します。」と述べている。³⁾

しかし、「声かけ」には喜びを感じさせるものだけでなく高齢者を不快にさせるものもある。これまでの文献のなかでも介護者（介護職員）の声かけが高齢者の心に刺激を与え、人間らしい生活の実現に寄与するということがいわれているが、具体的な声かけとその影響に関しては触れられていない。

そこで、本研究では、介護者の意識的な声かけが、高齢者の活動意欲を向上させる一因になるのではないかと考え、①介護者の肯定的な声かけが多いほど、高齢者の活動意欲が高くなる、②介護者の否定的な声かけが多いほど、高齢者の活動意欲が低くなる、③活動意欲の得点と性別、年齢、要介護度に関係がある、という仮説をたて介護者のどのような声かけが高齢者の活動意欲にどう影響しているのかについて明らかにし、今後の介護予防対策の推進に資することを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査期間：

平成 18 年 9 月 27 日 ～ 平成 18 年 10 月 26 日

2. 調査対象：

滋賀県、静岡県、神奈川県の高齢者保健施設 5 施設の利用者のうち、インタビューに答えることができ、調査対象となる承諾が得られた入所高齢者 45 人

3. 調査方法：

面接法による質問紙調査

4. 調査項目と測定尺度：

介護職員から日頃①肯定的な声かけ②否定的な声かけをされる頻度について質問調査を実施する。

質問調査における①肯定的な声かけ、②否定的な声かけと考えられる言葉は、筆者らを含めた介護の有識者 10 名によるグループディスカッションにより抽出した言葉の中から選出した。さらに諏訪茂樹の「嫌われる言葉と喜ばれる言葉」を参考に項目の整理をした。肯定的な声かけの内容は、利用者本位の言葉、気遣い・心配りの言葉、激励の言葉、誉め言葉、力として頼む言葉の 5 項目とした。否定的な声かけの内容は、援助者本位の言葉、感謝を強いる・恩着せがましい言葉、指示的・命令的な言葉、否定的な言葉、期待しない言葉の 5 項目とした。（資料 1）

また、①肯定的な声かけ5問（4件法15点満点）、②否定的な声かけ5問（4件法15点満点）、③日常生活における活動意欲の程度を Vitality index（意欲の指標）⁴⁾（資料2）を活用し測定する。

なお、要介護度については、京極高宣監修・新版介護福祉辞典より要介護度1から3を「要介護度低群」とし、要介護度4から5を「要介護度高群」とした。

（資料1）

		質問文（肯定的な声かけ）	よくある	時々ある	あまりない	全くない
1	利用者本位の言葉：利用者の利益を優先する言葉	あなたは、日頃、職員から『ゆっくりでいいですよ』といった声かけをされることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
2	気遣い・心配りの言葉	あなたは、日頃、職員から『ありがとう』といった声かけをされることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
3	激励	あなたは、日頃、職員から『〇〇をやってみましょう』とすすめられることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
4	褒め言葉：利用者を肯定的に評価する言葉	あなたは、日頃、職員から『お上手ですね。私にも教えてください。』と声をかけられることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
5	力として頼む	あなたは、日頃、職員から『頼りにしていますよ。お願いします。』と言われることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
			合計得点		点	

		質問文（否定的な声かけ）	よくある	時々ある	あまりない	全くない
1	援助者本位の言葉：利用者の利益よりも援助者の都合を優先する言葉	あなたは、日頃、職員から『早くして』といった声をかけられることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
2	感謝を強いる・恩着せがましい言葉	あなたは、日頃、職員から『〇〇してやった』とか『〇〇をしてあげた』といった声かけをされることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
3	指示的・命令的な言葉	あなたは、日頃、職員から『（危ないから）やめて！』と止められたりすることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
4	否定的な言葉：利用者への否定的な評価につながる言葉	あなたは、日頃、職員から『あまり上手ではないですね』『また忘れたんですか』といった声かけをされることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
5	期待しない	あなたは、日頃、職員から『できないからやめましょう』という声かけをされることはどの程度ありますか。	3	2	1	0
			合計得点		点	

(資料2) Vitality index (意欲の指標)

各項目の状況について、あてはま内容に○をつけてください。

1) 起床 (Wake up)	いつも定時に起床している	2
	起こさないと起床しないことがある	1
	自分から起床することがない	0
2) 意思疎通 (Communication)	自分から挨拶する、話しかける	2
	挨拶、呼び掛けに対し返答や笑顔がみられる	1
	応答がない	0
3) 食事 (Feeding)	自分で進んで食べようとする	2
	促されると食べようとする	1
	まったく食べようとししない	0
4) 排泄 (On and Off Toilet)	いつも自ら便意尿意を伝える、あるいは自分で排尿排便を行う	2
	時々尿意、便意を伝える	1
	排泄に全く関心がない	0
5) リハビリ、活動 (Rehabilitation, Activity)	自らリハビリテーションに向かう、活動を求める	2
	促されて向かう	1
	拒否、無関心	0
合計点		点

除外規定： 意識障害、高度の臓器障害、急性疾患（肺炎などの発熱）

判定上の注意：

- 1) 薬剤の影響（睡眠薬など）を除外、起座できない場合、開眼し覚醒していれば2点
- 2) 失語の合併症がある場合、言語以外の表現でよい
- 3) 器質的消化器疾患を除外、
- 4) 麻痺で食事の介助が必要な場合、介助により摂取意欲があれば2点
- 5) 口まで運んでやった場合も積極的に食べようとするれば2点
- 6) 失禁の有無は問わない
- 7) 尿意不明の場合、失禁後にいつも不快を伝えれば2点
- 8) リハビリテーションでなくとも散歩やレクリエーション、テレビなどでもよい
- 9) 寝たきりの場合、受動的理学運動に対する反応で判定する

III. 分析方法

尺度得点の平均の差についてはt検定を行い、各尺度間の関連はピアソンの積率相関係数を求め、各尺度間の影響については重回帰分析を行った。なお、分析にはSPSS (Student Version) を使用した。

IV. 結果

1. 記述統計量：

- ①性別： 男 11 人、女 34 人
- ②要介護度： 平均 2.2 (SD 1.04) 全国平均は 3.7 (平成 15 年調査)
- ③肯定的声かけの平均得点 (15 点満点)： 7.98 点 (SD 3.65)
 - 要介護度低群 8.15 点
 - 要介護度高群 6.60 点
- ④否定的声かけの平均得点 (15 点満点)： 2.29 点 (SD 2.06)
 - 要介護度低群 2.03 点
 - 要介護度高群 4.40 点
- ⑤意欲の平均得点 (10 点満点)： 8.31 点 (SD 1.94)
 - 要介護度低群 8.35 点
 - 要介護度高群 8.00 点

2. 要介護度別の声かけと活動意欲の影響：

肯定的声かけ、否定的声かけ、意欲との関連を要介護度別の関連を検討するためピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、要介護度低群において肯定的声かけと意欲の相関係数は $\gamma = 0.307$ となり、肯定的声かけと意欲の間にはやや正の相関が見られた。

また、無相関の検定においては、両側有意確率 $0.054 > 0.05$ となり肯定的声かけと意欲に有意差はみられなかった。次に、否定的声かけと意欲の相関係数は $\gamma = -0.486$ であり、否定的声かけと意欲の間には中等度の負の相関が見られた。また、無相関の検定においては、両側有意確率 $0.001 < 0.05$ となり否定的声かけと意欲との間には相関がみられた。(表1)

続いて要介護度高群において肯定的声かけと意欲の相関係数は $\gamma = -0.909$ であり、非常に高い負の相関が見られた。また、無相関の検定においては両側有意確率 $0.033 < 0.05$ となり、肯定的声かけと意欲に有意差がみられた。次に、否定的声かけと意欲の相関係数は $\gamma = 0.231$ であり、やや相関がみられた。また、無相関の検定においては、両側有意確率 $0.709 > 0.05$ となり否定的声かけと意欲に有意差はみられなかった。(表2)

つまり、要介護度低群においては、否定的声かけと意欲は中等度の負の相関がみられ、要介護度高群においては、肯定的声かけと意欲は非常に高い負の相関が見られたことがわかった。

(表 1)

相関係数^a

		肯定的声	否定的声	意欲
肯定的声	Pearson の相関係数	1	.063	-.909*
	有意確率 (両側)	.	.919	.033
	N	5	5	5
否定的声	Pearson の相関係数	.063	1	.231
	有意確率 (両側)	.919	.	.709
	N	5	5	5
意欲	Pearson の相関係数	-.909*	.231	1
	有意確率 (両側)	.033	.709	.
	N	5	5	5

*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

a. 介護度高 = 介護度 4 から 5

(表 2)

相関係数^a

		肯定的声	否定的声	意欲
肯定的声	Pearson の相関係数	1	-.330*	.307
	有意確率 (両側)	.	.038	.054
	N	40	40	40
否定的声	Pearson の相関係数	-.330*	1	-.486**
	有意確率 (両側)	.038	.	.001
	N	40	40	40
意欲	Pearson の相関係数	.307	-.486**	1
	有意確率 (両側)	.054	.001	.
	N	40	40	40

. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。**.

a. 介護度高 = 介護度 1 から 3

これらの結果より、要介護度の低い群・高い群で肯定的・否定的声かけと意欲に対する異なった相関関係が認められたため、要介護度高低群別の重回帰分析を行った。その結果、要介護度低群においては、肯定的声かけの標準化係数 β が 0.164 で意欲とほとんど相関はなく、否定的声かけと意欲においては、標準化係数 β が -0.432 で中等度の負の相関が認められた。したがって、要介護度低群において意欲は、肯定的声かけでは相関が認められず、否定的声かけで意欲が低くなる傾向があることが分かった。

次に、要介護度高群においては、肯定的声かけの標準化係数 β が -0.927 で意欲と非常に高い負の相関があり、また否定的声かけと意欲においては、標準化係数 β が 0.289 でやや相関があることが認められた。したがって要介護度高群において意欲は肯定的声かけで低くなる結果となった。

(表 3)

(表 3)

Table 1 介護度における意欲への影響

	介護度低群			介護度高群		
	N	β	r	N	β	r
肯定的声かけ	40	.16	.31	5	-.93*	-.91*
否定的声かけ	40	-.43**	-.49**	5	.29	.23
			$R^2=.26^{**}$			$R^2=.91^\dagger$

$^\dagger p < .1$ * $p < .05$ ** $p < .01$

V. 考察

介護職員による利用者への声かけは、活動意欲に重要な働きかけとなる。本研究では、要介護度の高低において、声かけと活動意欲には関連があることがわかった。介護者の肯定的な声かけも要介護度の高い高齢者においては、活動意欲を低下させる傾向にあることも明らかになった。一方、要介護度の低い高齢者にとって、肯定的な声かけは、活動意欲を引き起こし、自ら行動を起こそうとするときの後押しになると考えられる。また、肯定的に認められれば次の活動への意欲も高まっていき、自らリハビリテーションやレクリエーション活動を求めることにつながると考えられる。日常の援助のなかで肯定的な声かけを意識的に行っていくことは、高齢者の意欲に働きかけることとなる。そこで重要なことは「言葉」であり、「明るい言葉」を多用すれば、自分の感情も明るくなり周囲の人の感情も明るくすることができ、それが前向きな行動にもつながるといえることである。

しかし本研究より、要介護度4、5の比較的自立度が低いグループにおいては、肯定的な声かけにより活動意欲が低下することが示唆されている。これについては、調査に使用した質問項目が、肯定的な声かけの中でも、身体を動かすような行動を誘発する声かけとなっており、要介護度の高い高齢者にとって意欲にむすびつきにくい内容であったことが結果に反映されたものと考えられる。木菱らはリハビリテーション場面における声かけについて、「無意識のうちに患者様の意欲を低下させる可能性があることを考慮しつつ、患者様への対応を再検討する必要がある」と述べている。また、一般にうつ状態の者に対し、肯定的な声かけに含まれるような“励まし”は逆効果の可能性があると指摘もある。

したがって、介護場面においては利用者の身体的状況（例えば要介護度に表される介護を要する度合いやうつ状態等）が、周囲の声かけの内容と利用者の活動意欲との関連に影響を与える可能性があると考えられる。

VI. まとめ

本研究において、介護者の声かけが、高齢者の活動意欲にどのように影響しているのか検討をおこなった。その結果、要介護度の高低において、声かけと活動意欲には関連があることがわかった。介護者の肯定的な声かけも要介護度高群においては、活動意欲を低下させる可能性があることが明

らかになった。

今後は、調査対象の人数を増やし、肯定的声かけと否定的声かけの内容ごとに活動意欲との関係を調査し、認知症やうつ病などの罹患状況との関連性を考慮していく必要があると考える。

謝辞

本研究にあたり、滋賀県・静岡県・神奈川県介護老人保健施設の利用者の皆様、職員の皆様に深く感謝申し上げます。また、滋賀県の調査にあたってはNPO法人・宅老所「心」の村田美穂子氏にも深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 兵庫県社会福祉協議会監、黒田研二・藤井博志編「介護予防大作戦 地域で進める介護予防」、中央法規出版、2頁(2004)
- 2) 本間善之・成瀬優知・鏡森定信「高齢者における身体・社会活動と活動的余命、生命予後の関連について—高齢者ニーズ調査より—」『日本公衛誌』、(46-5)、380～390頁(1999)
- 3) 諏訪茂樹著「介護専門職のための声かけ・応答ハンドブック」中央法規出版、152頁(2005)
- 4) 鳥羽研二監「高齢者総合的機能評価ガイドライン」厚生科学研究所、102頁(2003)
- 5) 高山直著「心理学のプロが直伝「叱る、誉める、励ます」技術 実践EQ!相手の感情を操る「200の声かけ」一伝え方のうまい下手がひと目でわかるシート付き」『プレジデント』(Vol44-4)、34～35頁(2006)

参考文献

- (1) 厚生労働省「平成15年度介護保険事業状況報告年報」
- (2) 総務省統計局「推計人口」(平成15年10月1日現在)
- (3) 石垣和子・北池正・宮崎美砂子監、財団法人総合健康推進財団編「保健師・看護師のための介護予防の知識と技術」中央法規出版(2005)
- (4) 木菱由美子・高橋由美子・佐々木和人「リハビリテーションにおける患者様への効果的な声かけについて」『専門リハビリテーション研究会誌』Vol.3(2004)
- (5) 京極高宣監修、中央法規出版「新版 介護保険辞典」(2002)
- (6) 福祉士養成講座編集委員会 中央法規「新版 社会福祉士養成講座14」(2006)

(2007年12月26日受理)